



Title	A greater reduction in γ -GTP was associated with achieving BP <140/90 mmHg without antihypertensive medication among individuals who newly developed Grade I hypertension
Author(s)	小原, 僚一
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/105701
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

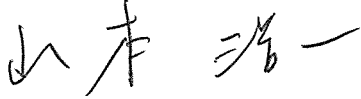
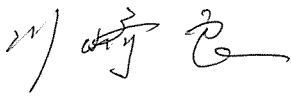
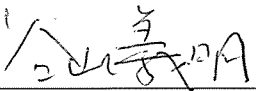
The University of Osaka

論文内容の要旨
Synopsis of Thesis

氏 名 Name	小原 僚一
論文題名 Title	A greater reduction in γ -GTP was associated with achieving BP <140/90 mmHg without antihypertensive medication among individuals who newly developed Grade I hypertension (I度高血圧を新規に発症した患者において γ -GTPのより大きな減少は降圧薬なく血圧140/90 mmHg未満を達成することと関連していた)
論文内容の要旨	
〔目 的(Objective)〕 我々は過去に神奈川県平塚市の特定健診受診者のデータを用いて、高血圧に対する治療を受けていない健診時に I 度以上の高血圧を発症した健診参加者が次回健診で血圧<140/90mmHgを達成する要素を検討した。解析結果にて次回健診時まで降圧薬を処方されていない集団でも50%以上の降圧を認めたため、特に降圧薬無集団に注目し、血圧<140/90mmHgを達成に影響する特徴を追加解析し、健診後の生活指導に活用できる情報を得ることを目的とした。	
〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕 平塚市在住の40歳から74歳の国民健康保険に加入している健診参加者で、2016年5月1日から2023年3月31日までに特定健診を受診し、2回以上の健診記録がある参加者で、基準となる健診時に収縮期血圧 ≥ 140 mmHg、かつ/または拡張期血圧 ≥ 90 mmHgを認め、6カ月以上高血圧治療を受けていない5428人の血液検査データ、および身体測定検査データを解析した。データは特定健診データ、レセプトデータ、国民健康保険被保険者台帳データを加工したデータを用いた。次回健診までに降圧薬を処方された降圧薬有群は2468人、降圧薬を処方されなかった降圧薬無群は2960人であり、次回健診時に血圧<140/90mmHgを達成したのは降圧薬有群では1515人、降圧薬無群では1656人であった。また次回健診時、血圧<130/80mmHgを達成したのは降圧薬有群で472人、降圧薬無群で508人であった。次回健診時に血圧<140/90mmHg、血圧<130/80mmHgを達成した集団の特徴を検討するため、血圧の目標ごとに達成群と未達成群の血液検査データ、身体測定データを解析し、統計学的有意差を示す項目を検討した。結果、健診時値において、次回健診時に血圧<140/90mmHgを達成した集団の健診時の項目ではLDL-C、年齢、BMIの低値、eGFRの高値を認め、血圧<130/80mmHgを認めた集団では降圧薬有群では該当項目がなかったが、全体および降圧薬無群では腹囲、BMI、AST、 γ -GTPの低値を認めた。また次回健診時までの変化量においては血圧<140/90mmHgを達成した群ではTG、 γ -GTPが低下していた。さらに血圧130/80mmHgを達成した群ではBMI、TG、LDL-C、eGFRの低下を認めた。また達成群で収縮期血圧・拡張期血は健診時値、変化量とも、達成群の方が未達成群余地も低かった。過去の研究結果と今回の解析結果を踏まえ、平塚市の市民に視覚的に理解しやすい結果を示す必要があるため、決定木解析を用いて、血圧<140/90mmHg達成に影響する要素を降圧薬有群、降圧薬無群に分けて解析し、降圧薬有・無群ともに第一条件は過去の高血圧の既往、第二条件は健診時の血圧グレードであった。第三条件は降圧薬無群では γ -GTPの減少とTGに関連する条件であり、降圧薬有群では健診時の年齢であった。	
〔総 括(Conclusion)〕 脳出血による死亡者数が全国平均よりも常に高い平塚市の健康増進・医療費抑制にとって、市民の高血圧改善は重要課題である。しかし市が実行する生活指導は対象者が膨大である一方、指導員が少なく、効率的な生活習慣指導を行う必要がある。本研究の結果からは高血圧の既往がなく、健診時に I 度高血圧を指摘された降圧薬無の集団については減酒などの生活指導を行い、 γ -GTPが低下している集団では血圧<140/90mmHgを達成できる確率が上昇するかもしれない。また高血圧の既往があり、健診時 II 度以上の高血圧を認める健診受診者よりも高血圧の既往がなく、健診時の血圧が比較的低い健診受診者の中では達成率が高いため、低リスク集団に対して生活指導を行うほうが効率的な生活指導を行えるかもしれない。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 小原 僚一

論文審査担当者	主査	老年・総合内科学教授		署名
	副査	公衆衛生学教授		署名
	副査	先端分子治療学特任教授		署名

論文審査の結果の要旨

本論文は特定健診受診者を対象にした研究であり、健診時高血圧を認めた参加者のうち、次回健診時に降圧薬を処方せず降圧できた要因を解析している。研究の対象者には居住地域や年齢に偏りはあるものの、降圧薬を処方されていない集団に対する論文は少なく貴重である。本研究で示された γ -GTPの減少は、飲酒との関連に注目されがちであるが、血圧低下と関連し、より大きく減少しているほど降圧達成率が高かった。この結果は γ -GTPが生活習慣改善の影響を測る指標となる可能性を示した。さらに生活指導は高血圧の既往がなく、比較的軽症の高血圧である低リスク集団に行う方が達成率を改善する可能性を示した。本論文は今後の特定健診における対象者の選び方や生活指導及び生活習慣改善の影響を数値化できる可能性示した点に新規性がある他健診および保健指導の改善に寄与する可能性があり、本論文は学位論文に値すると考える。